

戦時における日中研究者のつながり ——松枝茂夫宛陶晶孫関連書簡二通について

中村みどり

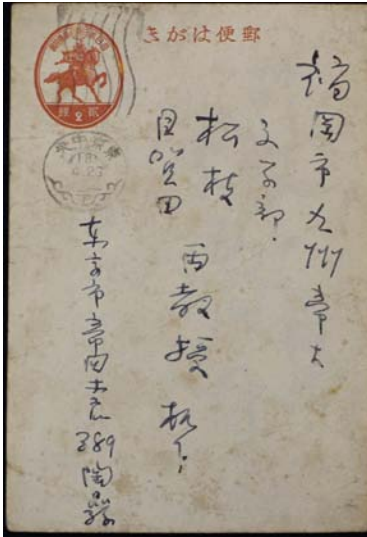
徳泉さち・小川利康編「早稲田大学會津八一記念博物館所蔵『松枝茂夫旧蔵書簡』目録」で整理されているとおり、同博物館が所蔵する松枝茂夫宛書簡 No.12 と No.719 は陶晶孫に関連する。書簡 No.12 は、日本で教育を受けた中国の医学者かつ作家である陶晶孫が、太平洋戦争中の1943年4月滞在先の東京から松枝茂夫と目加田誠に送った葉書である。日本占領下の上海に身を置いた陶晶孫は、当時「大東亜文学者大会」をはじめとする日本の国策の対中文化政策に巻き込まれていた。同書簡では、ともに中国文学研究者で九州帝国大学教員であった松枝茂夫と目加田誠の両氏に苦渋に満ちた胸の内を吐露している。

また書簡 No.719 は、戦後台湾から亡命し、市川に住まいを構えた陶晶孫が1952年2月に病死した後、彼の三男陶易王（伊凡）が松枝茂夫へ送った葉書である。消印が不明瞭であるが、1952年10月に刊行された陶晶孫の遺稿集『日本への遺書』送付の通知であることから、同年または遅くとも1953年に書かれたと推測される。上海の陶宅への松枝茂夫と中国農業経済史研究者の天野元之助の訪問が回想されており、書簡 No.12 と同様に、太平洋戦争期における松枝茂夫をはじめとする日本人研究者と陶晶孫との往来の一面を明らかにしている。

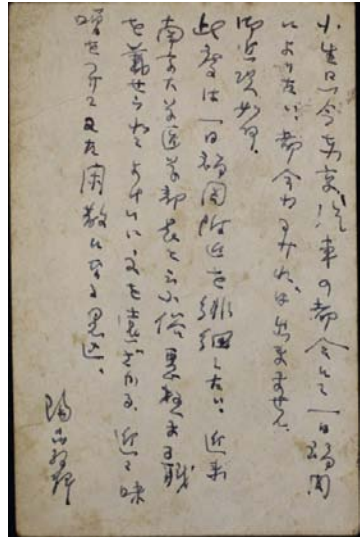
本稿では、この二通の書簡の内容を紹介するとともに、主に陶晶孫研究の視点から解説を付し、国策とは異なる空間で築かれた日中文化人のつながりを考

察する研究の一助としたい。

- 1. 書簡 No.12 (消印：東京中央 昭和 18 年 4 月 23 日、受取人：松枝茂夫・目加田誠、差出人：陶晶孫)



図版 1 書簡 No.12 表



図版 2 書簡 No.12 裏

【書簡・表】

福岡市九州帝大

文学部

松枝

両教授机下

目加田

東京市帝国ホテル 389 陶晶孫

【書簡・裏】

小生只今東京、汽車の都合にて一日福岡
によりたい、ご都合わるければ出来ません。

御近況如何。

此度は一日福岡附近を徘徊したい。近来
南京大学医学部長と云ふ俗悪極まる職
を兼せられてよけいに文を遠ざかる。近々味
噌をつけて又た閑散になる見込。

陶晶孫拜

【解説】

差出人の陶晶孫(1897-1952)は、日本留学経験を持つ中国人の医学者であり、また日本で中国人留学生たちが1921年に結成した文学グループ「創造社」の作家として知られている。本名は陶熾。幼少期に家族で来日し、青年期までの二十数年間を東京、福岡、仙台で過ごした。九州帝国大学医学部を卒業後、東北帝国大学理学部で心理学の研究に従事した。日本人女性佐藤みさを(1899-1993、創造社を代表する作家で九州帝大の先輩であった郭沫若の妻、佐藤をとみの実妹)と結婚、一家で中国へ帰国する。1929年より上海の東南医学院の教壇に立つたわら、故郷無錫の周辺の農村で公衆衛生の向上と調査に努めた。1931年11月、当初は日中政府の共同運営事業としてスタートした上海自然科学研究所の研究員となる¹。

文芸面では、初期はドイツロマン主義や日本新感覚派の作風を受け、瀟洒で都会的な作品を創作した。また大学オーケストラに参加し、指揮やピアノ、チェロを演奏するなど音楽にも造詣が深かった。一方、中国帰国後は方向転換した

1 入所当時は、病理学科の助手であった。

創造社の左翼文芸運動に参加し、舞台音楽を担当しながら日本の左派演劇人の作品紹介に尽力する。しかし1930年半ば以降は、文壇の表舞台から去り専門の医学の道をあゆむ。

日中戦争の戦火が広がると、フランス租界の南に位置する、純粹学理の追求をかかげた上海自然科学研究所もまた緊迫した空気に包まれた。外務省管轄下にあった同研究所は興亜院のもとに置かれるようになる。太平洋戦争が起こると、それまで自治権を有した「孤島」共同租界とフランス租界は日本軍に侵攻され、上海全体が陥落する。日本占領下の上海では、日本軍部、重慶国民政府、共産党、日本の傀儡政権であった汪兆銘の南京国民政府の権力闘争が繰り広げられ、暗殺や暴力が日常化するなか、庶民は身を縮めて一日一日を過ごした。知日派文化人であった陶晶孫は、日本側の対中文化政策への参加を求められ、鬱屈した日々を送る。なお彼が上海に留まったのは、上海の左翼文芸運動を指示した共産党員潘漢年の要請があったといわれている²。

日本の陸軍省、海軍省、外務省、興亜院を後ろ盾とした日本語国策新聞『大陸新報』（1939年1月～1945年9月）の刊行元の大陸新報社は、上海に残った文化人たちを支配下に置こうと画策する。日本国内で「大東亜共栄圏」のスローガンが唱えられ、作家を国策へ総動員する「日本文学報国会」が発足すると、さらに中国人文学者への抑圧は強まり、かつて創造社の作家であった陶晶孫は文壇に呼び戻された³。『大陸新報』主催の日本人作家との座談会への参加を求められ、1942年11月と1943年8月に日本で開催された第一回、第二回「大東亜文学者大会」の中国代表候補としてリストアップされる。辞退を重ねるが、1943年11月に汪兆銘政権の首都南京で開催された第三回大東亜文学者大会への出席、また南京に本部を置く中日文化協会の上海分会理事への就任

2 丁景唐「記念陶晶孫先生百年誕辰」（張小紅編『陶晶孫百歳誕辰記念集』百家出版社、1998年）などを参照。

3 戦時上海における陶晶孫については、拙稿「日本占領下における陶晶孫の言説——大東亜文学者大会と「老作家」・「狗」』（『野草』第102号（2019年3月））を参照されたい。

を余儀なくされる。この間、南京の中央大学医学院の院長も兼務した。

1943年4月23日消印の本書簡につづられた「南京大学医学部長」とは、「中央大学医学院長」を指す。『大陸新報』紙上、陶晶孫は時には齒に衣を着せず、中国の文化人に「大東亜共栄圏」の国策への関与を強いる日本側の傲慢な姿勢に対して不快感を示していた。「俗悪極まる職」とは、書簡の宛先人、ともに日本の中国文学研究者である松枝茂夫（1905-1995）と目加田誠（1904-1994）両氏に洩らした、陶晶孫の偽らざる本音であったと捉えられる。なお、目加田誠は松枝茂夫の東京帝国大学文学部支那文学科の一年先輩であり、当時目加田は九州帝国大学法文学部の教授、松枝は助教授であった。特記すべきは、両氏とも「中国文学研究会」の会員であり、松枝茂夫は会の運営にたずさわった同人であったことであろう。

周知のとおり、「支那学」ではなく同時代の文学として中国現代文学を捉えようと、東京帝大の支那文学科の卒業生たちが1934年に結成した在野の研究会在「中国文学研究会」である。研究会と松枝茂夫の年譜によれば⁴、本書簡が投函される約1年前、1942年に松枝茂夫は中国を旅行する。2月に長崎から上海へわたり、上海では「中国文学研究会」の同人であり、南満州鉄道株式会社の上海事務所にいた小野忍（1906-1980）宅に泊まる。そして4月に小野とともに陶晶孫に会っている。

国民政府に追われ、1928年から日中戦争勃発の直後まで日本で亡命生活を送った創造社の郭沫若は、1935年1月に講演「易に就て」を中国文学研究会の例会で行っている。また同じ創造社の作家郁達夫が1936年11月に来日した際には、同研究会は歓迎会を開催開催するなど、創造社の作家と中国文学研究会のひとびととの間には交流があった⁵。若き日の松枝茂夫は、郁達夫と郭沫

4 「年譜（昭和九年—昭和十九年）」『復刻 中国文学 別冊』（汲古書院、1971年）、「松枝茂夫略年譜・著作目録」（『松枝茂夫文集』第二巻、研文出版、1999年）による。

5 同上。

若の作品を愛読し⁶、「続・中国文壇をのぞく」（1930）のなかで創造社の各作家の作品を批評していた。当時すでに中国へ帰っていた陶晶孫の上海における芸芸活動については、次のように高い評価を与えている。

陶晶孫は戯曲「黒衣人」や小説「木犀」等によって創造社中つとに認められて居た人だ。今や二十年の日本留学を終えて上海に帰り、達夫の後をうけて此の雑誌〔『大衆芸芸』を指す：引用者〕の編輯に当り、花々しく活動しはじめた。[中略] 晶孫は盛んに戯曲小説を書く外、また木人戯社という新劇団を組織し、自ら監督もし出演もするらしい。木人戯というのは村山知義氏の試みている所のアヤツリのことであって、晶孫は現に村山氏の「やっぱり奴隷だ」や「阿片戦争」やを翻訳し且つ最も実演した。⁷

1942年の上海旅行の際、初めて松枝茂夫は陶晶孫と顔を合わせた可能性があるが、少なくとも松枝の方は、陶晶孫のことを以前から知っていたことがうかがえる。陶晶孫の方もまた中国文学研究会については、親しい友人の郁達夫や郭沫若から見聞していたと思われる。同会のメンバーは陶晶孫より一世代下であるが、官制の文化を批判し、芸術や学問の自由を追求する姿勢は、国境を越えて陶晶孫と重なる。第一回「大東亜文学者大会」に際しては、中心的メンバーであった竹内好によって「役人ぶった歓迎の片棒を担ぐことは伝統が許さぬ」、「弄ばれる支那文学が痛ましい」、と参加の拒否が表明され⁸、本書簡が投函される1ヶ月前、会は自主的に解散していた。

6 「郭沫若さんの思い出」（『松枝茂夫文集』第二巻）。初出は『郭沫若選集』8（雄渾社、1978年）の「読者のしおり」、原題は「郭さんの思い出」。

7 「続・中国文壇をのぞく」（前掲、『松枝茂夫文集』第二巻）53頁。初出は『支那哲文雑誌』7号（1930年3月）。同文で紹介されているとおり、陶晶孫は、ドイツ留学の経験を持つ左派演劇家の村山知義の影響を受け、人形劇「やっぱり奴隷だ」（1927年）、戯曲「阿片戦争」（1929年、江馬修作・村山知義改補）などを中国語に訳し、創造社の機関誌『洪水』や『大衆芸芸』に掲載した。

8 竹内好「大東亜文学者大会について」（『中国文学月報』第89号、1942年11月、復刻版）。

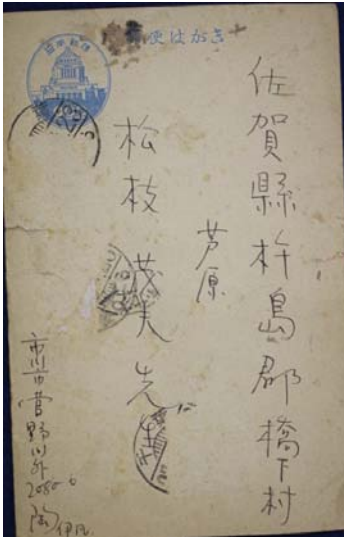
日本の学术界で研鑽を積み、だがそれゆえ日本の対中文化政策に巻き込まれた陶晶孫にとって、国策とは距離を置き、文学を純粹に愛する中国文学研究会のメンバーであった松枝茂夫や目加田誠との面会は、強く望むものであったと思われる。当時、日本から上海へ行くには、長崎と上海を結ぶ定期航路を利用し、福岡はその通過点であった⁹。さらには、九州帝国大学は彼の母校であり、青春時代を過ごした場所であったことも陶晶孫をその地に向かわせた理由の一つであろう。なお書簡に記されている、陶晶孫の東京滞在の背景は定かではない。かねてより病弱であった陶晶孫は、戦時体調を崩し何度か療養のため鶴沼周辺を訪れているが、差出の住所が帝国ホテルであることから、おそらく公的な立場での出張であった可能性が高い。

現在目にすることができる陶晶孫の文章からは、中国帰国後の日本の科学者や医学者との行き来は把握できるが、同時期における日本の中国文学研究者との個人的な関係については、あまり知られていない。本書簡は、これまで明らかにされてこなかった、戦時における陶晶孫と中国文学研究会メンバーとの交流をたどる重要な手がかりとなる。

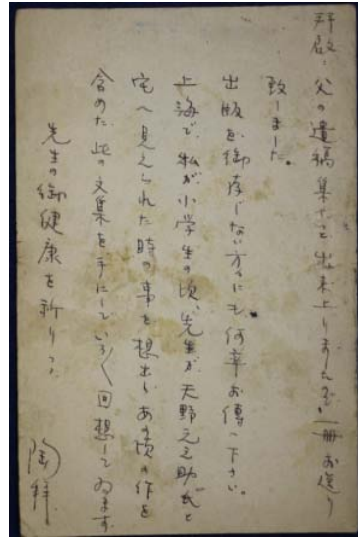
※書簡の著作権について、陶晶孫のご遺族である遠藤絢先生のご協力をいただきました。ここに記してお礼を申し上げます。

9 「小野忍さんを弔う」(前掲、『松枝茂夫文集』第二巻、1980年12月の小野忍葬儀での弔辞)では、南満州鉄道株式会社の上海事務所にはいた小野忍が東京と上海とを行き来する際、よく福岡の松枝宅に立ち寄ったことが回想されている。

2. 書簡 No.719 (消印：千葉、23日〔年月不明〕、受取人：松枝茂夫、
差出人：陶伊凡)



図版3 書簡 No.719 表



図版4 書簡 No.719 裏

【書簡・表】

佐賀縣杵島郡橋下村

芦原

松枝茂夫先生

市川市菅野川外 20806 陶伊凡

【書簡・裏】

拝啓：父の遺稿集やっと出来上りましたので一冊お送り

致しました。

出版を御存じない方々にも何卒お傳へ下さい。
上海で私が小学生の頃、先生が天野元之助氏と
宅へ見えられた時の事を想出し あの頃の作を
含めた此の文集を手に行っている〜回想してゐます。

先生の御健康を祈りつつ。

陶拝

【解説】

1945年日本の敗戦により、五十年間にわたり日本の植民地であった台湾は、中華民国へ返還される。だが、日本式の教育を受けてきた本省人と新たに中国大陸から台湾にわたった外省人の間には大きな溝が生まれ、やがて本省人を弾圧し、多数の死者と行方不明者を出した1947年の二・二八事件へと発展する。前年8月、陶晶孫は国民政府から旧台北帝大である台湾大学へ派遣され、医学部兼熱帯医学研究所の教授として教壇に立った。台湾への派遣の背景には、日本留学時期からの旧知であり、台北帝国大学の接収にあたり台湾大学の初代校長に就任した羅宗洛とのつながりがあったとされる¹⁰。

二・二八事件当時、陶晶孫は上海へ出張していたが、日本に留学して日本人女性を妻とし、また戦時は日本の研究機関につとめ、日中二カ国語で創作活動を行ってきた彼は、国民政府のもと外省人が本省人を支配する台湾社会のゆがみを見つめることになる。そのようななか、国民政府の圧政に対して台湾大学学生の一人として抗議運動に参加した三男易王がブラックリストに載る。義兄であった郭沫若が、中華民国と敵対する、1949年に建国された中華人民共和国の中央政府政務院副総理に就任した政治的背景も重なり、陶晶孫は家族を連

10 台湾における陶晶孫については、陶易王「父親在台湾」（『新文学史料』1992年第4期）、澤地久枝「日中の懸橋 郭をとみと陶みさを」（『完本 昭和史のおんな』文藝春秋、2003年）、黄英哲「越境者としての陶晶孫——『淡水河心中』論」（『立命館文學』第615号、2010年3月）などを参照した。

れて台湾から日本へ亡命することを決意する。1950年4月、学会への参加を名目として陶晶孫一家は緊張のなか日本行きの飛行機に乗り込んだ。無事にたどり着いた、幼年期から青年期まで二十数年間を過ごしたなつかしい日本の地は、今や敗戦国としてアメリカをはじめとする連合国軍の占領下にあった。

亡命者として身を潜めて暮らし、1951年によく日本の永住権を手にした陶晶孫は妻の佐藤みさをとともに市川に居を構える。長尾研究所の研究員を務めるかたわら、東京大学文学部の講師として中国文学史を教えた。またかつて上海で知り合った日本人文学者たちとの旧交をあたため、文芸誌『群像』や『文学界』などに日本語でエッセイを発表する。「大東亜戦争」の傷痕を脇に押しやり、アメリカに追隨する日本の姿を「一度暴れたために、先生に落第させられた秀才」と指摘した文章は、国家や民族のはざまを生きつづけてきた陶晶孫ならではの鋭さとユーモアが光る。日本の文壇で高い評価を受け、文筆活動へ意欲を示しつつも、肝臓癌を患った陶晶孫は1952年2月に亡くなる。同年10月、その早すぎる死を悼む友人たちの手により、日本語遺稿集『日本への遺書』（創元社）が編まれ刊行された。

同書には、1950年の来日以降に記した日本語エッセイ15篇と短篇小説3篇のほか、戦時中に上海で刊行された『陶晶孫日本文集』（華中鉄道株式会社総裁室広報室）のなかから選ばれた日本語エッセイ11篇が収められている。巻頭には、上海時代以来の旧知である内山完造と草野心平のほか、佐藤春夫、河上徹太郎、呉清源が序文を寄せ、巻末には妻佐藤操（みさを）による「あとがき」、三人の子息、陶隸土、陶方之（坊資）と陶伊凡（易王）による追悼文「父陶晶孫の思出」、さらに陶晶孫の弟陶烈の親友であった脳学者の柘植秀臣がまとめた「追憶と業績」が付された。サンフランシスコ講和条約の発効からわずか半年後、戦後民主主義や「新中国」に関する議論がまだ盛んであった当時、この知日派中国人が残した『日本への遺書』は評判を呼び、半年以内に第三版が刊行された¹¹。著名な中国文学研究者である伊藤虎丸は、同書を読んで中国

研究の道を志したことを回想している¹²。その後、さらに出版元を変えて二度刊行され、重ねて戦後五十年にあたる1995年に東方書店から新版が刊行された。また2008年に至り、上海文芸出版社から中国語版『給日本的遺書』が上梓されている¹³。

本書簡に記された「父の遺稿集」とは、この『日本への遺書』を指す。手紙の差出人である伊凡は、当時千葉大学の医学生であった陶晶孫の三男易王の筆名である。陶晶孫夫妻の三人の子息は医学あるいは工学を専門とするが、なかでも上海で1929年に生まれた易王は芸術に親しみ、父の回想録や小説を残している。日中戦争中の上海で陶晶孫と幼い易王の父子二人だけで暮らした期間もあった。被占領民として憤怒の涙を流す父の姿を易王は記憶している¹⁴。

なお書簡に登場する天野元之助とは、京都帝国大学経済学部卒業後、南満州鉄道の調査部につとめた中国農業経済史の研究者(1901-1980)である。二千人以上の調査員を擁した調査部内では、マルクス主義的な理論で満洲国の運営を唱えるグループが生まれ、1942年9月と翌43年7月に調査員が関東軍の憲兵隊に検挙される満鉄調査部事件が起こる¹⁵。以後、満鉄の調査部は独立的な調査を自粛し、国策に沿う姿勢を強めてゆく。検挙の対象とはならなかったものの、天野もまた「レッド・パージにかか」り、1943年9月以降は大連図書館で古農書研究をつづける¹⁶。戦争終結後は1948年まで中国に留まり、長春鉄路公司の科学研究所経済調査局主任研究員を務めた。天野元之助が松枝茂夫とともに陶家を訪問したのは、上海事務所に駐在した1936年9月から大連に赴任する1942年4月までの間であったはずである¹⁷。書簡No.12の解説で記

11 刊行当時の『日本への遺書』に対する評価は、伊藤虎丸【**【**解題**】**戦後五十年と『日本への遺書』】(陶晶孫『日本への遺書』東方書店、1995年)を参照とした。

12 同上。

13 曹亜輝、王華偉訳『給日本的遺書』(上海文芸出版社、2008年)。

14 陶易王「二人の擲弾兵 父晶孫と郭沫若」(『新夕刊』1954年1月25日)。

15 小林英夫『満鉄調査部の軌跡 1907-1945』(藤原書店、2006年)、松村高夫・柳沢遊・江田憲治 編著『満鉄の調査と研究——その「神話」と実像』(青木書店、2008年)などを参照した。

したとおり、松枝茂夫と陶晶孫が直接知り合ったのが1942年4月頃と推測すれば、やはり同時期のことであったと思われる。陶晶孫と天野元之助、そして松枝茂夫との間でどのような会話が交わされたのかは知る由もない。しかし、軍の仕事とは別に、無錫、太倉、嘉定など江南の農村を歩きまわり田賦制度の聴き取り調査を行ったという天野元之助の回想からは¹⁸、故郷の無錫周辺の農村で公衆衛生の調査をつづけていた陶晶孫と研究上の話題で語り合うことが少なくなかったと思われる。

1930年代初め、陶晶孫は医学の分野で中国社会の改革へとつながる地方での公衆衛生の向上に尽力する。一方、文芸面では、のちにゾルゲ事件で逮捕される、コミンテルンの活動家であった朝日新聞社記者の尾崎秀実とともに中国の左翼演劇の戯曲を日本に紹介するなど、上海の左翼文芸運動の支柱となった。1930年代半ば以降、文壇からは離れ、また日本の研究機関へと変わった上海自然科学研究所に留まったものの、中国社会の改革への思いは公衆衛生学の研究や農村調査に引き継がれ、地道な活動は戦争終結までつづけられた。さらなる考察を要するが、あるいは陶晶孫と天野元之助の結びつきは、陶晶孫と1941年に検挙された満鉄調査部嘱託社員でもあった尾崎秀実との関わりにつながる側面を有していたかもしれない。

前述のとおり、『日本への遺書』には『陶晶孫日本文集』から転載した日本語エッセイも収められていた。「留守番日記」、「通勤日記」、「弱虫日記」を

16 天野元之助の略歴は、「天野元之助年譜」（天野弘之・井村哲郎編『満鉄調査部と中国農村調査——天野元之助中国研究回顧——』不二出版、2008年）、原宗子編「天野元之助博士略歴」（『流通経済大学 天野元之助文庫』<https://www2.rku.ac.jp/hara/amanotop.htm>、2019年6月30日接続）による。原宗子編の年譜は、「大半は、1977年天野元之助博士より受贈の自筆履歴」に基づいているという附記があり、本稿で記した「レッド・パージにかかり」は、「天野博士筆記のママ」という表現をそのまま引用した。

17 1929年生まれ陶易王が書簡に「上海で私が小学生の頃」と記していることも手がかりの一つとなる。

18 第I部「鼎談 天野元之助中国研究回顧・上海事務所時代」（前掲、天野弘之・井村哲郎編『満鉄調査部と中国農村調査』）による。

はじめとする、これらの作品では、日中戦争勃発後、戦火を避けて家族を日本へ送り出し一人上海に残った寂寞、被占領民としての屈辱、日中の研究者をひとしく尊重した上海自然科学研究所の新城新蔵所長への敬愛とその死に対する哀しみなど、さまざまな感情が陶晶孫特有のユーモアと諷刺を交えたロマン的な筆致でつづられている。本書簡の「あの頃の作を含めた此の文集を手にしてゐる〜回想してゐます」という易王の言葉には、日中戦争以後、上海、台北、東京と越境し、動乱の時代を命を削って生きた父に対する慈しみがこもっている。そしてまた陶晶孫の境遇を理解し得る人として、松枝茂夫宛に書簡が書かれたことがうかがえるのである。

戦後、松枝茂夫はいったん東京大学文学部の助教授となるが、妻ハル子が病死したため、残してきた子供たちの面倒を見るため、辞して佐賀県の住まいへ戻る。小倉市立北九州外国語大学に二週間に一度通うほかは、山中の家にこもり、戦時中にははじめた中国の古典長篇小説『紅樓夢』の全訳を完成させた¹⁹。文学に没頭してきた松枝らしい選択であったといえる。『日本への遺書』が刊行された当時、すでに東京都立大学へ赴任していたが、本書簡の宛先は、この佐賀の住まいとなっている。

本書簡に見られる、戦時上海における陶晶孫と天野元之助の交流は、おのこの専門分野から、中国の地に根差した改革を試みた日中の文化人たちの水面下での行き来を今日に伝えている。松枝茂夫と目加田誠と同じように、これまで天野元之助と陶晶孫との接点については知られてこなかった。本書簡もまた、日中間の戦争期に私的に紡がれた、両国の研究者たちのつながりおよびその戦後における継続を考える上での重要な資料として位置付けられる。

19 前掲、「松枝茂夫略年譜・著作目録」による。

【附記】 松枝茂夫の教えを受け、『松枝茂夫文集』を編纂された都立大学名誉教授の飯倉照平先生が2019年7月24日にご逝去された。飯倉先生は筆者の修士課程の指導教官であり、授業のあいまによく松枝茂夫や竹内好の話をされていたことが懐かしく思い出される。生前のご厚情に深く感謝するとともに、心よりご冥福をお祈り申し上げます。